

巻頭言

「アナと雪の女王」を観て

理事長 新谷 友良

ディズニーの「アナと雪の女王」が空前のヒットで、公開から見た人約1,757万人、興行収入は220億円と報道されています。

この映画は北欧を舞台にしており、2年前に国際難聴者会議で行ったノルウェー・ベルゲン近郊のフィヨルドの光景がそのまま画面に表れていました。それだけでも個人的には面白かったのですが、この大変な人気は原作のアレンジが良かったのか、主題歌「Let it go」などのサウンドトラックが抜群だったのか、CG画面の完成度が素晴らしかったのか、そのどれもが原因のようです。前にもこの欄で書きましたが、最近のアニメでは宮崎駿の「風立ちぬ」が個人的には好みなのですが、夏の甲子園とサッカーワールドカップの差のようなものを感じてしまいました。

こんな話題の多い「アナと雪の女王」ですが、先日新聞で興味ある記事を読みました。それは、この映画の観客の9割が吹き替え版を観たということです。サウンドトラックにささえられた吹き替えとは思えない登場人物の有名俳優による話声や歌声が、字幕より圧倒的に訴求力があることは容易に想像できます。広い観客層を対象にするアニメなどの吹き替えが非常に多くなるのは自然な流れなのかもしれません。字幕付き日本映画は少ないので、聞こえに困っている我々は洋画を見ることが多いのですが、特に名作のリバイバルででもない限り、テレビで放映される洋画は吹き替えがほとんどになりました。最後の牙城と思っていた劇場映画もこの流れにのみこまれてしまいそうで心細い思いがします。

上記の新聞記事は「字幕だと原則、1秒間に表示できる日本語は4文字という制約がある。」と書いています。そして「アナと雪の女王」のようなミュージカルではさらに「訳詞」という難題が立ちのぼる、と書いています。小さい頃でも感激した洋画はいくつもありました。スターの英語などのセリフが分かるはずもなく、おそらく字幕を見て笑いこけたり、涙を流したりしたはずですが、字幕を見ている抵抗感はほとんど記憶に残っていません。それほど、画面と違和感のない字幕だったのか、音声は補っていたのか確かめることは難しいですが、字幕の目指すべき目標が、このような抵抗感のなさ、一体感にあるのは確かなこと。生字幕を別にしてテレビ字幕もクローズド字幕に長く安住すべきでないと思っています。